「夕焼け姫」を特産品に

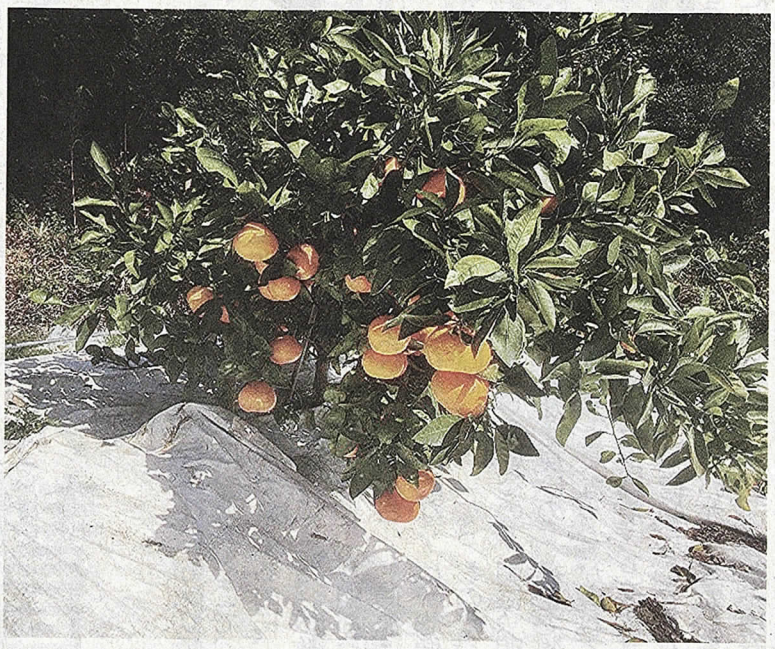
22年11月に初収穫へ

県独自のかんきつ新品種 東海市が試験栽培

県農業総合試験場で開発された県独自のかんきつの新品種「夕焼け姫」を、東海市が市の特産品にするため、試験栽培に乗り出した。二〇一九年度に同市加木屋町に千三百七十平方㍍のほ場を整備し、百本の苗木を植えた。さらに二〇年度には隣の畑二千百平方㍍を借りて整備し、二百五十本を植えて栽培する。農家と連携し、産地化、ブランド化を図っていく。

（福本英司）

夕焼け姫は、他のミカンより紅色が濃い品種で、一三年に品種登録された。一般的なミカンと比べて一週間早く収穫できることで、市場での単価も高く設定できる利点がある。農家によると、見た目の赤さが、よりおいしさを引き立たせるという。



昨シーズンに実った「夕焼け姫」＝東海市農業センターで

市農業センターでは先行して、試験的に一六年三月に苗を植え、一八年秋に収穫して栽培が可能かどうかなどを調べてきた。

モデル園地として整備した今回のほ場では、市果樹振興会（坂野五十鈴会長）内に昨年十二月に設立した市マルチ栽培夕焼け姫管理会（荒谷芳興会長）の農家が管理していく。さらに二〇年度に上部組織として部会もつくり、農家十人が参加する。

栽培では、水が浸透しにくい特殊なシートを使って育てることで、糖度が保てるという。消毒や水やりなどの管理を続け、二二年十一月に初収穫できる見込みだ。

今年三月中旬に苗木の植え込み作業があり、坂野会長や、管理会の荒谷会長と加古博之副会長、鈴木淳雄市長らが参加して、高さ数十㌢の苗を支柱に沿って植えていった。

坂野会長は「農業センターで試験をする中で、糖度などは抜群に良かった。このほ場をモデルとして、いい物を作っていきたい」と抱負を語り、荒谷会長も「これから東海市の名産品となるミカンになる。しっかりと管理していきたい」と力を込めた。

今回のほ場以外にも、市内の農家が一九年度に二百四本を、二〇年度には四百六十二本を購入して栽培する予定で、農家が協力して新しい特産品の産地化に向けて進んでいく。

夕焼け姫の苗木を植える坂野会長（手前左）や鈴木市長（同右）＝東海市加木屋町で

ちた特報 ニュースのつぼ